

特別支援教育における授業のユニバーサルデザイン 化の意義

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-06-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山元, 薫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00009539

特別支援教育における授業のユニバーサルデザイン化の意義

The significance of universal design of the class in the special needs education

山 元 薫

Kaoru YAMAMOTO

（平成 27 年 10 月 1 日受理）

I. 問題と目的

「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(報告)」(文部科学省, 2012a) では, 「共生社会の形成に向けて」「就学相談・就学先決定の在り方」「障害のある子どもが十分に教育を受けられるための合理的配慮及びその基礎となる環境整備」「多様な学びの場の整備と学校間連携等の推進」「特別支援教育を充実させるための教職員の専門性の向上」の5つの項目について報告がされた。このことにより, 平成19年度に始まった特別支援教育の理念の具現化とその推進がさらに求められ, 中でも, 通常の学級における発達障害等のある特別な教育的ニーズのある児童生徒を包括する就学や就学後の指導方法の開発を含め, 教員の特別支援教育を充実させるための専門性が向上が急務となった。

小中学校の通常の学級には平均6.5%の「学習面」「行動面」「コミュニケーション面」に何らかの支援を必要とする児童生徒が在籍している(文部科学省, 2012b)ことも明らかになっている。インクルーシブ教育システム構築に向けて, 特に発達障害に関する一定の知識・技能は, 発達障害の可能性のある児童生徒の多くが通常の学級に在籍している通常の学級の担任こそ, 最も必要性が高いことが分かる。また, 同報告では, 知的発達に遅れはないものの「学習面」又は「行動面」で著しい困難を示すとされた児童生徒のうち, 校内委員会において特別な教育的支援が必要と判断されている児童生徒は18.4%, いずれの支援も受けていない児童生徒は38.6%, 授業時間内に教室内で個別の配慮・支援を行っていない児童生徒は49.9%であり, 十分な支援が実施されているとは言いがたい状況が明らかになった。

発達障害等の困難さから学習に参加できなかつたり友達との関係が上手く築けなかつたりする児童生徒は通級による指導を受けることができる。しかし, 通級による指導を利用している児童生徒は0.82%である(文部科学省, 2015)。通常の学級担任は学級経営や集団における授業の中で対応することを基本とし, 全ての児童生徒が「学びの実感」(静岡県, 2010)が得られるように指導の工夫を図ることが必要である。

そこで注目されているのが, 「ユニバーサルデザイン(universal design)」である。ユニバーサルデザインは, 日本においては障害者基本計画(平成14年12月閣議決定)及びバリアフリー・ユニバーサルデザイン推進要綱(平成20年3月関係閣僚会議決定), バリアフリー新法(国土交通省・警察庁・総務省, 2006)における定義のもと, 一般的に建築物, 交通・移動, 通信, 商

品とその考えが社会に浸透しつつある。教育においても、学校周辺のバリアフリー化、校舎のバリアフリー等はすでに進んでいる。近年、建物等のユニバーサルデザイン化から、物理的な環境から指導や支援に至る質的な内容も包括して学校教育をユニバーサルデザイン化する取組が全国的に起こってきている。

本稿においては、ここ数年で増加しているユニバーサルデザインの活かし方やそれに基づいた教育実践に関する論文を整理することで、インクルーシブ教育システムの構築に向けて推進が求められている特別支援教育において、ユニバーサルデザインがどのような効果もたらすのか展望したいと考える。

Ⅱ. 学校教育におけるユニバーサルデザインに関する全国の研究動向

1. 論文検索による研究の動向

国内の学校教育におけるユニバーサルデザインに関する論文を、「ユニバーサルデザイン」「授業」をキーワードに国内学術論文検索サイト CiNii で論文検索すると、該当数は125本であった（検索日：2015年8月25日）。論文を総覧すると、2004年に佐藤、太田氏の提言を始まりとして現在に至るまでを論文の内容によって3つの期間（初期、中期、後期）と分けることができた。まずは、この3つの期を中心にユニバーサルデザインに関する動向を述べる。

2004年から2008年までを初期とした。この期間の論文数は13本で、そのほとんどがユニバーサルデザインの必要性や有効性を提言という形でまとめたものである。唯一、漆澤（2007）は授業改善の方法として、視覚的な情報を用いることや授業の展開（導入、展開、まとめ）を構造化することを国語科の授業（題材名かんじのひろば「にているかん字」）を例にして報告している。また、花熊（2008）は、個別的な配慮の必要性と共に学級経営・授業づくりの全体を見直す必要性を指摘し、学校規模での取り組みの必要性を併せて示した。柘植（2008）は、授業づくりにおける指導のポイントをこれまでの実践を俯瞰し、授業構成の工夫、指示、机間支援、板書などについて示した。

2009年から2011年までを中期とした。この時期の論文数は14本で、提言とユニバーサルデザインに関する実践報告が出てきた時期である。

2009年では4本のうちの2本が小学校での実践報告に、2010年ではすべてが実践報告になっている。内容は、個別の支援を全体の中に取り入れるといった手法が報告され、学級規模の授業改善にまでは至っていない。2011年には、桂氏による子どもの困り感に寄り添った、教材における「しかけ」を中心に国語の授業の実践報告がされている。これは困り感のある子どもへの配慮を授業全体の指導工夫の手法として、全体の中に包括していく形である。また、湯浅（2011）は、「通常学校の改革と授業づくり」の中で、子どもが参加できる学級づくり、多様な学びの場とホールスクールアプローチ、インクルーシブ授業論の展望の中で学習の共同化について指導の基礎技術と照らし合わせて述べた。

2012年から2015年までを実践期とした。この時期の論文数は98本となる。

2012年は論文数が前年度の3倍以上とな16本になり、2012年から2015年8月までの論文の内59.2%が実践報告となっている。2012年には、涌井が協同学習を教育方法に位置づけた実践を、2013年には、福井県特別支援教育センターや京都府総合教育センター等の研究紀要に研究協力校の実践報告がされている。あわせて、2012年までは、主として実践報告の教科は国語科であったが、算数科、図画工作による授業実践の報告もされるようになる。2013年後半は、授業

のユニバーサルデザイン研究会の小貫や村田等がインタビュー記録や実践報告等でユニバーサルデザインの授業のつくり方として提案した「焦点化」「視覚化」共有化」を引用する実践が増え、個別の支援を全体の指導の中に位置づけるといった実践から授業全体も構想し直し指導の工夫を図る実践が出始める。

2014年は、46.8%が実践報告であり、そのうちの57.0%が小学校、29.0%が中学校、14.0%が高等学校の報告となり、高等学校まで実践が広がっていることが分かる。

2015年は、授業改善の視点として「焦点化」「視覚化」「共有化」を活用している研究が多い傾向にあり、2015年8月で78.0%が実践報告となっている。

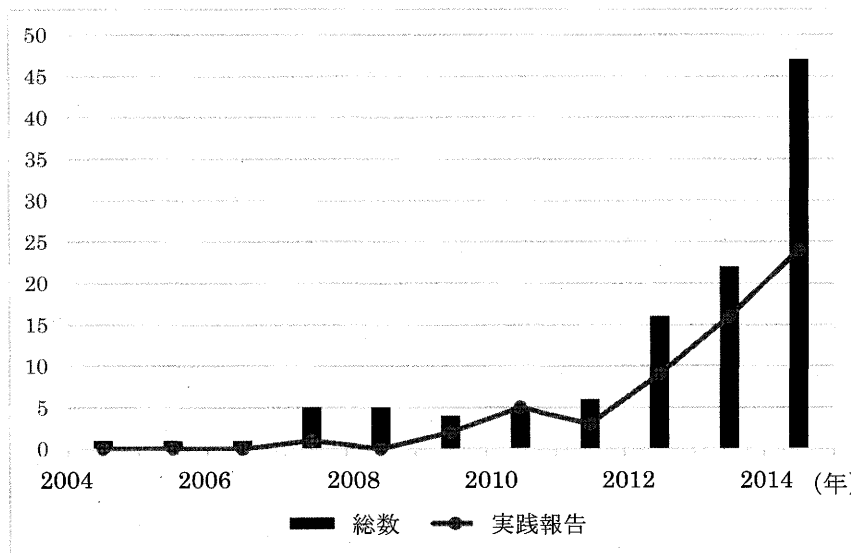


図1 論文数

2. 書籍等による研究の動向

書籍横断検索システムと Google scholar を使って「授業」「ユニバーサルデザイン」をキーワードに検索を行い集計した（検索日：2015年8月25日）。

廣瀬・桂（2009）は「通常の学級担任がつくる授業のユニバーサルデザイン」で、どの子ども「わかる」授業を目指し、国語と算数の題材や單元ごとに実践例を示した。同年、高山は「あったかクラスづくり通常の学級で無理なくできるユニバーサルデザイン」で、発達障害のある児童生徒の対人関係における困難さに配慮したソーシャルスキルトレーニング（Social Skill Training）を盛り込んだ学級経営におけるユニバーサルデザインの実践方法を示した。

2010年には、東京都日野市公立小中学校全教師・教育委員会と小貫による「通常学級での特別支援教育のスタンダード」が出版され、学級担任や教科担任等の子どもに関わる手立てや特別支援教育コーディネーターの校内委員会をスムーズに運営する方法、学校管理職の学校経営上でのポイントが示され、後に各学校が参考とする書籍の一つとなる。また、授業のユニバーサルデザイン研究会から「授業のユニバーサルデザイン」が出版され、教科教育と特別支援教育の融合としてユニバーサルデザインの考え方を取り入れた教科の授業づくりへの認知度が高まる。

2011年桂は「論理が身につく考える音読の授業」で、すべての子どもたちが論理的思考を身

に付けることができる国語の授業における「しかけ」を掲載した。同年、花熊は、「小学校ユニバーサルデザインの授業づくり・学級づくり」で学級経営と授業づくりの両方からのアプローチで、すべての児童生徒の授業参加につながることを述べている。

2012年は、授業のユニバーサルデザイン研究会編著、桂、石塚編著の「授業のユニバーサルデザイン」シリーズで授業だけでなく、校内研修の進め方が例示された。

2013年は、授業のユニバーサルデザイン研究会編著の指導ガイドを中心に授業設計に関する本が国語科について全学年出版された。

2014年からは、授業のユニバーサルデザイン研究会から、国語科だけでなく、算数科、社会科、道徳、音楽科の各教科等におけるユニバーサルデザインの考え方と実践例が示された本が出版された。

Ⅲ. 授業のユニバーサルデザイン化に向けた実践の特徴

表1は、Ⅱの論文の実践内容からキーワードを抽出し整理したものである。「授業の焦点化・視覚化・共有化」に関する実践28.1% (27本)、集団指導の中における個別の支援に関する実践16.7% (16本)、授業の基礎技術の徹底が12.5% (12本)、CASTに基づく実践が9.4% (9本)、ソーシャルスキルトレーニングを活用した学級づくりが8.3% (8本)、各学校が独自に開発したチェックリスト等を用いた実践が8.3% (8本)、学級環境の調整が6.3% (6本)、指導方法に協同学習を取り入れている方法が4.2% (4本)、PASS理論 (Planning, Attention, Simultaneous, and Successive Processes theory) に基づく授業づくりが2.0% (2本) となった。以下、一つずつ実践の内容について外観する。

表1 実践の取組内容

取組内容	本数	%
授業の焦点化・視覚化・共有化	27	28.1
集団における個別の支援	16	16.7
授業の基礎技術	12	12.5
CAST (UDL の原則)	9	9.4
SST	8	8.3
学校で独自に開発したデザイン	8	8.3
学級環境の調整	6	6.3
協同学習	4	4.2
PASS 理論に基づく授業づくり	2	2.0
その他	4	4.2

「焦点化」「視覚化」「共有化」とは、小貫 (2013) が授業をユニバーサルデザインにするキーワードとして用い、指導の工夫を図る方法である。これは、児童生徒のつまづきを把握し、全ての児童生徒が授業の目標を達成するために活動に参加できるように目標や活動を焦点化し、情報を視覚化し、学んだことを共有化する場面を設定するなどの授業のづくりを実践している。

集団における個別の支援では、読字障害や算数障害の児童生徒への支援支援方法の具体が示されている。この報告は、集団の中で特別な教育的ニーズのある児童生徒に対して、ワークシートや板書量の工夫、タブレットの利用などを行うことで、集団の中で学習することが可能

になったことを報告している。特に多層指導モデルMIM（読みのアセスメント・指導パッケージ）の活用により学習のつまずきを早期に発見し、集団指導の中で個別の支援を実践している実践と、通級指導教室を活用しながら特別な教育的ニーズのある児童生徒の学び方を明らかにし担任と共有しながら集団の中での学習活動を可能にする実践も含まれている。

授業の基礎技術では、発達障害の特性を踏まえ、授業の基礎技術（発問、指示、板書、教材・教具）について見直しを図り授業を実践することで特別な教育的ニーズのある児童生徒の授業への参加を促進することが可能になったことを報告している。

「学びのユニバーサルデザイン（Universal Design for Learning,UDL）」とは、提示に関する多様な方法の提供（表象）、取組に関する多様な方法の提供（参加）、行動と表出に関する多様な方法の提供（表現）の3つの原理に基づいて、柔軟な教材、柔軟な指導方略を用いることによって、児童生徒の多様なニーズに応えることができる授業づくりであると定義している（CAST,2011;Gargihlo & Metcalf,2013）。このUDLのガイドラインに対応した手立てや支援方法を立案し指導実践している。

ソーシャルスキルトレーニングでは、学級の実態に対応して、定期的に「あいさつに関するスキル」「自己認知スキル」「相互理解のための言葉・表現スキル」「相互理解やセルフコントロールのための気持ち認知スキル」「セルフマネジメントスキル」「コミュニケーションスキル」（U-SST ソーシャルスキルワーク日本標準に基づく）の中から必要な内容を実践し、学級全体のスキルの向上を図ることで、特別な教育的ニーズのある児童生徒の授業への参加率が改善する実践である。

学校独自に開発したデザインでは、まず、学校独自のガイドラインに基づいて、チェックリストを作成し、学級集団と特別な教育的ニーズのある児童生徒の実態把握をする。その後、学習上のつまずきを踏まえ授業の改善を図ることで、全ての児童生徒の授業への参加率を改善する実践である。

学級環境の調整では、教室の整理整頓、構造化、前面黑板周りのシンプル化などが多く報告されている。先述の中期に多い実践である。

協同学習は、UDLの指導方法の一つとして用いられている実践である。涌井（2012）は「一人ひとりの学び方の違いに応じて、いろいろな学び方が選べる授業」と定義している。

PASS理論に基づく授業づくりでは、PASS理論を用いた実態把握、授業仮説を立案し授業実践を通して検証する方法をとっている。PASS理論を用いることで、特別な教育的ニーズのある児童生徒の学び方に対応した手立てや支援方法を実践することができたとしている。

IV. 実践の背景にある基本となる考え方

実践報告書で用いられている基礎となる考え方を引用文献及び参考文献の使用頻度から捉えてみる。

1. 集計からみるユニバーサルデザイン

引用数を集計すると、書籍では、「通常学級での特別支援教育のスタンダード」11、「授業のユニバーサルデザインVOL 1～6」9、「授業のユニバーサルデザインを目指す国語授業の全時間指導ガイド（ユニバーサルデザイン研究会・桂・廣瀬, 2013）6、「通常学級の授業ユニバーサルデザイン」（佐藤, 2010）5、「国語授業のユニバーサルデザイン全員が楽しく分かるできる国語授業づくり」（桂, 2011）5、「通常の学級担任がつくる授業のユニバーサルデザイン」

(廣瀬・桂, 2008) 5, 「小学校ユニバーサルデザインの授業づくり・学級づくり」(花熊, 2011) 4となっている。また, 論文数では, 「学びのユニバーサルデザイン」8, 「選べる!ユニバーサルデザインな授業づくり」(涌井, 2012) 4, 「通常の学級の授業ユニバーサルデザインー「特別」ではない支援教育のために」(佐藤・深澤・全日本特別支援教育研究連盟, 2010) 4であった。

表2 実践報告に見られる引用数

書籍	引用回数
通常学級での特別支援教育のスタンダード	11
授業のユニバーサルデザイン VOL 1～6	9
授業のユニバーサルデザインを目指す国語授業の全時間指導ガイド	6
通常学級の授業ユニバーサルデザイン	5
国語授業のユニバーサルデザイン全員が楽しく分かる できる国語授業づくり	5
通常の学級担任がつくる授業のユニバーサルデザイン	5
小学校ユニバーサルデザインの授業づくり・学級づくり	4

論文	引用回数
学びのユニバーサルデザイン	8
選べる!ユニバーサルデザインな授業づくり	4
通常の学級の授業ユニバーサルデザインー「特別」ではない支援教育のために	4

このことから, ユニバーサルデザインの実践の背景としてある基礎となる考え方としては, 小貫・日野市教師・教育委員会 (2010) の包み込むモデルと環境整備等のスタンダード, ユニバーサルデザイン研究会・桂・廣瀬 (2013) の「授業のユニバーサルデザイン」, 佐藤 (2014) が述べている通常の学級におけるユニバーサルデザイン7つの原則 (導入の工夫, 学習への見通し, 明確なルールや約束, 多様な感覚を生かして学べる場, 教師の指示や発問, 友達との学びの場や選択場面の設定, 板書やワークシート), 花熊 (2011) が述べている5点 (「教室環境や学習環境の整備」「学習や行動のルールの明示」「視覚的てがかり・分かりやすい指示による見通しの立てやすい授業」「複数の学習方法や教材の準備」「教師の支援技術の向上」), 涌井 (2012) の協同学習の設定が中心的であると言える。

2. 各基礎となる考え方

一つずつ基礎となる考え方に触れる。小貫・日野市教師・教育委員会 (2010) の包み込むモデルと環境整備等のスタンダードは, 子どもを取り巻く「個別的配慮」「指導方法」「学級環境」「学校環境」「地域環境」と階層的に捉え, その層ごとどのような工夫や整備をすべきかをスタンダードとして示している。この考え方の特徴としては, 従来の特別支援教育の視点である個々の支援や指導に留まらず子どもを取り巻く環境において一人一人の教育的ニーズに配慮又は対応していこうとするところである。そして, 発達障害のある子にとって学びやすい環境は, どの子にとっても学びやすい環境と定義している。

ユニバーサルデザイン研究会・桂・廣瀬 (2013) の「授業のユニバーサルデザイン」では,

小貫の提案する授業のユニバーサルデザインを基本的な考え方とし、国語科においては桂を中心に、社会科については村田を中心に、他教科の実践と共に実践例を紹介している。全ての児童生徒が授業に参加するための指導の工夫として「焦点化」「視覚化」「共有化」をキーワードとし、指導の工夫を図る手法である。また、授業をユニバーサルデザイン化するプロセスも明らかにし、授業をつくる手続きが明確になっている。

佐藤（2010）は、ユニバーサルデザインを「発達障害等を含む配慮を要する子どもには「ない」と困る支援」であり、どの子どもにも「あると便利で・役に立つ支援」を増やす。その結果として、全ての子どもたちの過ごしやすさと学びやすさが向上する」と定義し、通常の学級におけるユニバーサルデザイン7つの原則（導入の工夫、学習への見通し、明確なルールや約束、多様な感覚を生かして学べる場、教師の指示や発問、友達との学びの場や選択場面の設定、板書やワークシート）を提案している。

花熊（2014）は、実態把握と学習面での支援での不十分さを述べており、「教室環境や学習環境の整備」「学習や行動のルールの明示」「視覚的で分かり・分かりやすい指示による見通しの立てやすい授業」「複数の学習方法や教材の準備」「教師の支援技術の向上」の5点を学校全体で取り組むことの大切さを指摘している。

涌井は、ユニバーサルデザインな授業とは「すべての子がわかる・できることを目指した授業であり、一人ひとりの学び方の違いに応じて、いろいろな学び方が選べる授業である」と定義している。いろいろな学び方が選べる授業のつくり方の一つとして、協同学習（cooperative learning）を指導技法として。また、協同学習と共に学び方を学ぶことを通して、ユニバーサルデザインな支援をすべてを教員一人が用意するのではなく、子どもたちの支え合いを育てることができるとしている。

V. 実践論文に見られるユニバーサルデザイン化による効果

実践の効果として挙げられていた内容をキーワード化して集計すると、表3となった。

まずは、授業における指導の工夫（「焦点化」「視覚化」「共有化」）により授業改善が図られた19本、個別の支援が充実した13本、特別な教育的ニーズのある児童生徒の授業に参加率が上がった13本、教材・教具の改善が進んだ12本、教員の指導技術（発問、指示、板書）が向上した9本、学級種運段の授業内容の理解が深まった7本、実態把握を丁寧に行うようになった6本、学級環境の整備が進んだ5本、学級経営が改善された4本、特別な教育的ニーズのある児童生徒の自己理解が進んだ3本、学級集団の「聞く力」が向上した、校内研修の活性化を図ることができた1本である。

基本となる考えに小貫と授業のユニバーサルデザイン研究会の提案する「焦点化」「視覚化」「共有化」による指導の工夫を図る方法を活用し、授業改善に効果をもたらしている実践が多いと言える。また、児童生徒のつまずきに配慮した指導の工夫をすることにより、「特別な教育的ニーズのある児童生徒の授業参加度」が上がり、「教材・教具」の改善が図られ、「指導技術の向上」、「学級集団の授業理解」の推進に効果があったと考える。あわせてユニバーサルデザインによる全ての児童生徒という意識を強調することにより、個別の支援も熟考されるようになり、実態把握、支援の実施、評価が授業づくりのプロセスに入り、効果が見られるようになったと考える。

表3 実践論文の成果内容

成果内容	本数
授業における指導の工夫	19
個別の支援の充実	13
特別な教育的ニーズのある児童生徒の授業参加度	13
教材・教具の工夫	12
教員の指導技術の向上	9
学級集団の授業内容の理解	7
実態把握	6
学級環境の整備	5
学級経営	4
特別な教育的ニーズのある児童生徒の自己理解	3
学級集団の「聞く力」	2
校内研修の活性化	1

VI. 総合考察

1. 実践の広がり

論文や書籍が増加するのに伴い学校における実践数も増加し、授業改善や個別の支援の充実に成果を出している。これは、学校教育での授業のユニバーサルデザイン化やユニバーサルデザインの考え方を活かした学校経営の基本的な考え方が整理されシステム化されることで、各学校において実情に合わせて取り組みやすくなってきていると考えられる。特に、小貫(2013)の授業のユニバーサルデザインのモデルや個への配慮、補充指導の構造図、桂の国語科におけるユニバーサルデザインな授業については全国的な広がりがあり、現在の実践の中心的な考え方となっていると言える。

このユニバーサルデザインの実践の広がりには、県や市町教育委員会によるユニバーサルデザインの啓発も貢献していると考えられる。北海道、埼玉県、千葉県、神奈川県、山形県、大阪府、京都府、岡山県、静岡県、佐賀県、大分県等では先行研究を引用し啓発用冊子やリーフレットを作成して、特別な支援を要する児童生徒の増加や学力向上を目的として小中学校での実践を推進している。このような行政の介入も、小中学校での実践が増加している重要な要因であると考えられる。

2. ユニバーサルデザインの限界

柘植(2011)が授業のユニバーサルデザインという考えと手法は始まったばかりで、その有効性や限界がまだ整理されているわけではない、同じく柘植(2015)はユニバーサルデザインという手法で、どんなに障害が重くとも、通常学級の中で、障害のない他の児童生徒と同じ内容を習得できる、と勘違いしているような声を聞くと述べ、ユニバーサルデザインに対する誤解も指摘している。桂(2011)は、授業のユニバーサルデザインにおける支援のレベルを、指導の工夫、個別の配慮さらに個別の配慮の中に特化した配慮が必要な場合もあると説明している。実際に桂は実践の中で、展開の工夫や教材のしかけだけでは授業の目標を達成できない児童生徒には、個別に対応をしている。また、小貫(2013)も授業の3段階構えとし、まずは全体への指導の工夫、全体の中での個別の支援、そしてそれでも難しい場合は個別に指導と、指導の階層性を指摘している。さらに、花熊(2015)や石塚・京極・廣瀬(2014)は一つの学級が

ユニバーサルデザインを実践していくのではなく、学校の体制づくりとして取り組むことが重要であることを指摘している。

授業のユニバーサルデザイン化の有効性は授業づくりや学級経営において多く検証されているが、加えて特別な教育的支援を必要とする児童生徒への個別の支援、特別支援教育に関する体制整備の充実も推進していくことも不可欠であることが示されている。様々な特別な教育的ニーズのある児童生徒が在籍する学級及び学校においては、まずはユニバーサルデザインで集団における指導の工夫を図りながら、それでも対応が難しい場合は、個別の支援又は特化した支援を行うことが大切であり、学校組織としては、校内委員会をはじめとした支援体制が充実していることが不可欠であると言える。

3. ユニバーサルデザインと特別支援教育

特別支援教育は平成19年度の通知文の理念に三つの内容が示されている（文部科学省，2007）。一つめは特別な教育的ニーズを把握し適切な指導と必要な支援をすること，二つめはあらゆる教育の場において実践すること，三つめに共生社会の形成に向けて基礎となる考え方であることと述べている。現在実践されている授業のユニバーサルデザインの多くは，小中学校を中心に，すべての児童生徒が授業に参加できるように学級経営や学校経営を見直し，生活しやすい集団づくりも実践している実践が多い。先に述べたように，ユニバーサルデザインの考え方を取り入れることにより，教員は全ての児童生徒の授業参加を意識し集団における指導の工夫を図りつつも，実態把握に基づいた個別の指導や支援方法を考えるようになる。管理職は，学校全体の特別支援教育の体制整備を図ることで学校組織としての発達障害等への対応に関する専門性の向上を図るように努めるようになる。まだ全国的には一部での実践ではあるものの，学校教育へのユニバーサルデザインの考え方を取り入れることは，特別支援教育の充実を図る一つの手法と言えると考えられる。

文献

- 石塚謙二・京極澄子・廣瀬由美子（2014）：自治体の明確な方針と支援姿勢の上で授業を中核に据えて研究を深めていく，総合教育技術，34-37.
- 漆澤恭子（2007）：国語科の授業をれいにしてー授業構成の工夫を 導入・展開・まとめのアイディアー，特別支援教育研究，34-39，597.
- 桂聖（2011）：国語授業のユニバーサルデザイン 全員が楽しく分かるできる国語授業づくり，東洋館出版社
- CAST（2011）Universal design for learning guidelines version 2.0 Wakefield,MA:Author.
〔キャスト（2011）バーズ亀山静子・金子晴恵（訳）学びのユニバーサルデザイン・ガイドライン ver.2.0.2011/05/10翻訳版〕
- 国土交通省・警察庁・総務省（2006）：高齢者，障害者等の円滑化の促進に関する法律
<http://www.mlit.go.jp/barrierfree/transport-bf/explanation/kaisetu/kaisetu.html>
- 小貫悟（2013）：授業のユニバー去りデザイン入門 どの子も楽しく「わかる・できる」授業のつくり方，東洋館出版社
- 佐藤慎二（2010）：通常学級の授業のユニバーサルデザイン，東洋館出版社

- 佐藤慎二 (2014) : 実践 通常学級のユニバーサルデザイン<1>学級作りのポイントと問題行動への対応. 東洋館出版社
- 佐藤慎二 (2015) : 実践 通常学級ユニバーサルデザインII. 東洋館出版社
- 静岡県教育委員会 (2011) : よりよい自分をつくっていくために, 4. 静岡県教育委員会
- 柘植雅義 (2008) : まとめと提言 特別支援教育の視点なしで質の高い通常学級の授業を実現できるか?, 特別支援教育研究, 607, 39-41.
- 柘植雅義 (2011) : 通常学級における授業ユニバーサルデザイン-その有効性と限界を巡って-, 特別支援教育研究, 652, 4-6.
- 東京都日野市公立小中学校全教師・教育委員会・小貫悟 (2010) : 通常学級での特別支援教育のスタンダード. 東京書籍
- 花熊暁 (2008) : まとめと提言 ユニバーサルデザインの学級経営と授業をめざして. 特別支援教育研究, 607, 36-41.
- 花熊暁 (2011) : 学校全体で取り組む授業ユニバーサルデザイン-子ども一人ひとりを大切に
する授業をめざして-, 特別支援教育研究, 652, 7-10.
- 花熊暁 (2015) : 学校全体で取り組むユニバーサルデザインとは, ユニバーサルデザインの視
点を活かした指導と学級づくり, 49-55, 金子書房
- 廣瀬由美子・桂聖 (2009) : 通常の学級担任がつくる授業のユニバーサルデザイン. 東洋館出
版社
- 文部科学省 (2015) : 学校基本調査. 文部科学省
- 文部科学省初等中等教育局 (2007) : 特別支援教育の推進について (通知). 文部科学省
- 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課 (2012a) : 共生社会の形成に向けたインクルーシブ
教育システム構築のための特別支援教育の推進 (報告). 文部科学省
- 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課 (2012b) : 通常の学級に在籍する発達障害の可能性
のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査. 文部科学省
- 湯浅恭正 (2011) : 通常学校の改革と授業づくり. 障害者問題研究39, 12-19. 全国障害者問
題研究会.
- ユニバーサルデザイン研究会・桂・廣瀬 (2013) : 授業のユニバーサルデザイン. 東洋館出版社
- 涌井恵 (2012) : 選べる!ユニバーサルデザイン授業づくり 「協同学習」のススメ: 子ども
同士の学び合いの力でユニバーサルデザインな授業ができる, LD&ADHD&ASD10 (2),
50-53